

1. 研究主題

豊かな心を育むための環境教育はいかにあるべきか

～環境教育指導者の指導力向上を目指して～

2. 主題設定の理由

(1) はじめに

現在、自然現象や人間の関わりによる環境汚染や温暖化による自然破壊など地球環境の悪化が深刻化し、環境問題への対応が人類の生存と繁栄にとって緊急かつ重要な課題となっている。豊かな自然を守り、私たちの子孫に引き継いでいくためには、エネルギーの効率的な利用など環境への負担が少なく持続可能な社会を構築することと現在の自然環境の保全を真剣に考える児童の育成が大切である。

学校は、子どもたちの人間形成に大きな影響を与える場であり、児童が環境に対するモラルやマナーの習得を通して、環境に関する知識を身に付けるのみならず、環境に配慮した行動が習慣として実践できるような場としての役割も担っている。また、集団活動を通して、環境問題の解決に不可欠な「人と関わる力」を養うことができる場でもある。

しかし、近年メディアでも多く取り上げられるようになり、急速に浸透してきている「SDGs」。教育現場の中では「聞いたことはあるけど難しそう」「具体的に何をすればよいかわからない」「新たな学習を取り入れる時間の枠がない」と言った現状が見られる。

そこで、年間を通して教科・領域の中で環境教育を意識して連携することで、「持続可能な社会を作る」にはどうすればよいかを一人ひとりが自分ごととして考え、行動していく姿勢を育てていきたい。

(2) 実態から

安食小学校は高台に構え、水田地域や利根川が見下ろせ、遙か彼方には富士山、筑波山を望むことができ、豊かな自然環境に恵まれている。創立150年の歴史がある本校は、西市で栄えた古くからの商店街と農業地帯、新興住宅地の混在する町である。本校は栄町の中心地区に位置する学校で、保護者や地域住民の学校教育への関心は高く、学校への支援について様々な面で多くの住民からの支えを得る協力体制が構築されている。

子どもたちは、大変素直で明るく伸び伸びと生活している。学習に対する姿勢をみると、与えられた課題に熱心に取り組むことはできる。また、課題解決を最後まで頑張ろうとする姿勢も見られる。しかし、積極的に課題を見つけ、よりよく解決したり、自分なりに表現したりすることは苦手で、受け身的な姿勢の児童が多い。また、基礎・基本となる事項の習得には、かなり個人差が見られ、学年によってはその差も大きい。

そこで各教科の授業において問題解決的な学習を工夫することにより、未来の地球のために環境に関する事柄に興味・関心をもち、自ら関わろうとする態度や環境への思いを仲間とともに共有し、自分たちのこととして大切にできる児童の育成を目指すことに重点を置き、本研究主題を設定した。

3. 研究仮説

年間を通して教科・領域の中で環境教育を意識して連携することで、「持続可能な社会を作る」にはどうすればよいかを一人ひとりが自分ごととして考え、行動していく姿勢が深まるであろう。

- 体験活動の充実
- 生活科と他教科の関わり（年間指導計画への補足）
- 教科の学習内容と環境教育との関係（ESDカレンダーの作成）
- まとめの発表の仕方の工夫



4. 生活科学習の実践（2学年 4月～7月）

①春のあそび 春さがしビンゴゲーム・マイクロハイク



新学期に入り、まずは春さがしを楽しみ。桜の花びらが風に吹かれて昇降口の前にピンクの絨毯を敷いている様子や1年生で育てたクロッカスやチューリップの花が満開になったことを気付くことができた。去年の学習から、休み時間にシロツメグサの冠や小さな黄色タンポポを摘んで教室に春を運ぶ児童も見られた。今年も豊富な自然体験を継続していくことで身近な自然環境への興味・関心をもたせていくことを考え、自然物を使った遊びに加えて、自然発見ゲームであるフィールドビンゴでは、色や形の違いや鳴き声や動く様子などに気付

いたり、動植物や諸感覚を使った行動ができる場所を見つけたりできるような活動を行った。事前に図書室から草花図鑑や生きもの図鑑、自然遊びや春に関わる絵本などを司書の先生の協力を受け教室に置くことで、児童はビンゴシート作りでは春に関するカードでマス目を埋め、校庭や芝生広場などで春さがしを楽しんでいた。しかし、子どもたちは、緑の多い環境に生活しているにも関わらず普段の遊びの中で自然と触れ合う機会が少ない。そこで虫めがねを使ってマイクロの世界を探検するということを子どもに伝え、意欲を高めた。自分の気になった場所に縄跳びを広げ、土や草のにおいをかいだり、小さい生き物とふれ合ったり、体全体で自然を感じる場となった。子どもたちは、縄跳びの縄に沿って動くありを見つけたり、タンポポの綿毛を観察したりしていた。ビンゴシートを2枚目、3枚目と作り休み時間に友達と楽しんだり、家の周りの探索をしたりと視野が広がってきた。



②花ややさいの大きくなるひみつ やさいを買ってそだてよう

ピーマン・シシトウ・ナス・ミニトマト・きゅうり・ゴーヤ・かぼちゃなど植木鉢や畑を利用して野菜作りに挑戦した。農地が多く広がる栄町は平らな土地が多く子どもたちが住む住宅地の周りには広い水田や畑がある。しかし、多くの児童は自分が



食べているものがどのように育ちどこから自分たちのもとに届いているのかを知らない児童が多い。野菜の苗を見ても、匂いを嗅いでもどんな野菜か想像することができない児童もいるが、1年生で学習した栽培活動から、土・肥料・水の大切さを感じていることは観察カードの言葉からわかる。児童は、事前に用意した、野菜の育て方の本を読んで調べたり、タブレットを使って野菜の生長を記録したりと自分のできることを考えながら活動できた。児童の中には、祖父母が家庭菜園や農家で実際に野菜の育てている人からアドバイスをもらってくる様子も見られた。また、春の町はっけんでお世話になった「まりさん」には、お水のあげ方を質問し野菜にちょうどいい水やりの時間を聞きみんなで実行する姿が見られた。算数科で学習したことを生かし、観察カードには草丈を測り記録することでどのくらい生長したか実感することができた。7月に入り、収穫時期を迎え作物の実りの喜びも味わうことができた。中には、育てている野菜が苦手な児童もいたが、自分の育てた野菜が家でおいしいサラダや肉詰めになったことや兄弟のお弁当に持って行ったことを嬉しそうに報告する姿が見られるなど食育へとつながっている。



③春の町をさんぽしよう あじきマスターに教えてもらおう！

本校では、毎年2年生を対象として地域のボランティアの方々と学校周辺を散策している。春から初夏にかけての植物も小さな生き物も豊富な季節の変わりめに毎年更新される植物の写真を手がかりに児童4、5人にガイドとしてボランティアが1人と小グループをつかって1時間ほどの時間をかけて散策を楽しんでいる。児童は、身近な自然に触れ親しんだり、地域の人たちから地元で伝わる話を聞いたり自然を感じるだけでなく、地域の生活を見つめる機会となっている。



④見つけたよこんな人こんなところ いちご村のまりさんに会いに行こう！

本年度から、栄町にある観光農園「いちご村」への見学と摘み取り体験を計画し実施した。栄町の農産物と言ったら当然千葉県1を誇る水田率からわかるように「お米」次いで、「どらまめ」そして「いちご」と子どもたちは感じるくらいいちごハウスを見かけます。2年ほど前から本校学区にある観光農園は12月から5月の連休まで摘み取り体験ができ、5月から11月まで新しいいちごの生育期間で閉園となる。また、1年を通じて農園で収穫したいちごを使ったジェラートを農産物直売場

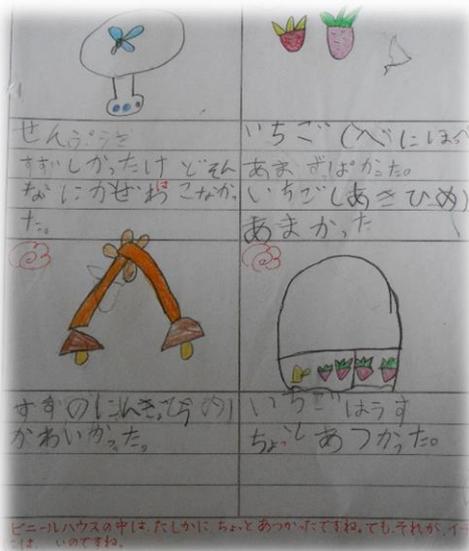
で販売している。農場があることを知っていた2年生の児童がだいたい半分ほどで、いちご狩りを体験した児童が5人であった。実際に、体験に行き児童のほとんどが農場の施設に気付いてはいたが中でいちごが育っていることを知らなかったことがわかった。このように、児童は実際にその場所に行って観察したり、話を聞いたり体験が少ないことは関心を引かないことがわかる。しかし、1度興味をもつともっと知りたいと探求したくなることがアンケートから感じられた。特に、アンケートではいちごが嫌い・食べられないと答えた児童が6名いたが、実際にいちごを食べなかった児童は2名であった。また、児童からの質問は、

① もっと知りたいいちごのこと (28)

② いちご村さんでは、どうしているのか知りたいこと (38)

③ これから自分がいちごを買ったり育てたりすること (9)

であった。自分たちが野菜を育てていることから知りたいと思うことがより近かったことも考えられる。また、見学当日は、目でも鼻でもいちごを感じることができた。事前アンケートの内容を「まりさん」に伝えて合ったことで農園の説明もハウス内の見学もスムーズでまた児童にとってもわかり



やすいものであった。摘み取り体験は、休園前ということでハウス全体を解放してもらったおかげで地産地消も少なからず感じることができた。学習後の変化はまず野菜の水やりにあった。水やりは、午前中に行うとよいことをわかりやすい説明であったことから、児童は登校すると教室に入る前に水やりを済ますようになった。学習のまとめに行った「おいしいイチゴをそだてるひみつをしらべよう！」カードには、自分たちで調べたり見学からわかったりしたことを絵や図を添えてまとめた後は学年で掲示発表を行った。いちごハウスの見学から栽培活動の変化・そして給食で栄町の食材が使われているなどの食への関心など態度面での変化が見られてきた。

② 雨の日のたんけん

ここ数年の気象異常は、今年度も改めて感じる機会が多く見られた。生活科の学習の中で、校庭の木々や緑の芝生広場に晴れている時だけでなく、雨の日に雨具を身に付け、自然観察を行う活動を行った。子どもたちの中には、雨の日は車での送迎と、雨の中を歩くことに慣れていない様子が見受けられた。よく見ると雨にぬれる植物や生きもの様子になど、晴れた人は違う、様々な発見をすることができていた。校庭が水でいっぱいになっている様子を見て「まるで海みたい」



